

芹橋足軽組地保存計画

対象地区の特徴

「土地所有者」の変化

- 天保7年(1836)彦根「御城下総絵図」には、当該地区に437名の足軽名が記載されている。これを基準年とする。1836年の居住者=土地所有者
- 法務局彦根市所蔵の閉鎖された「土地台帳」(もっとも古い土地台帳で、明治20年(1887)頃で作成されはじめたと推定される)により、1887年頃の土地所有者がわかる。1836年と同姓の土地所有者は173名である。これは39.6%にあたる。明治維新により足軽も失業を余儀なくされたが、定着率はびっくりするくらい高い。ちなみに上層の士族階層では明治20年までにほとんど家を売却し、転出している。
- 以後の土地所有者の変化を追うことができるが、1836年の114年後の昭和25年(1950)に同姓の土地所有者は25名であった。これは5.4%にあたる。この家々もそのまま住んでいるとみられる。
- 172年後の平成20年(2008)の住宅地図を見ると、1836年と同姓の家は8名(1.6%)である。現地調査をしたところ、このうち4軒は藩政期とみられる古い家であった。つまりこの4軒は、172年前の足軽時代から、おそらくその間6代ぐらい代わりしながら、同じ位置に、同じ家に住み続けているという、きわめて継続性の強いまれな家である。

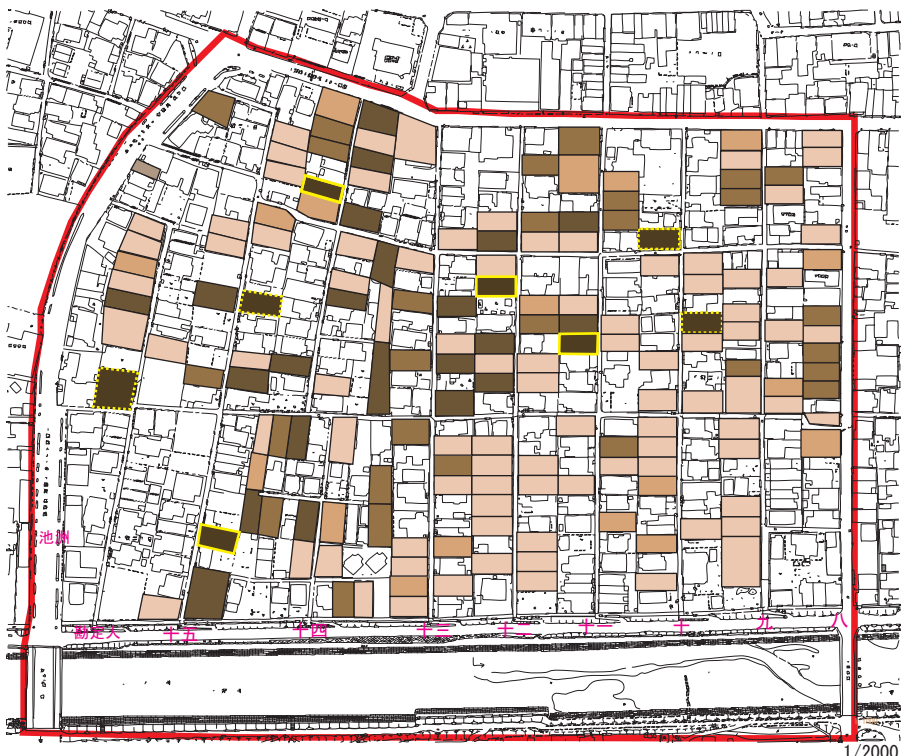
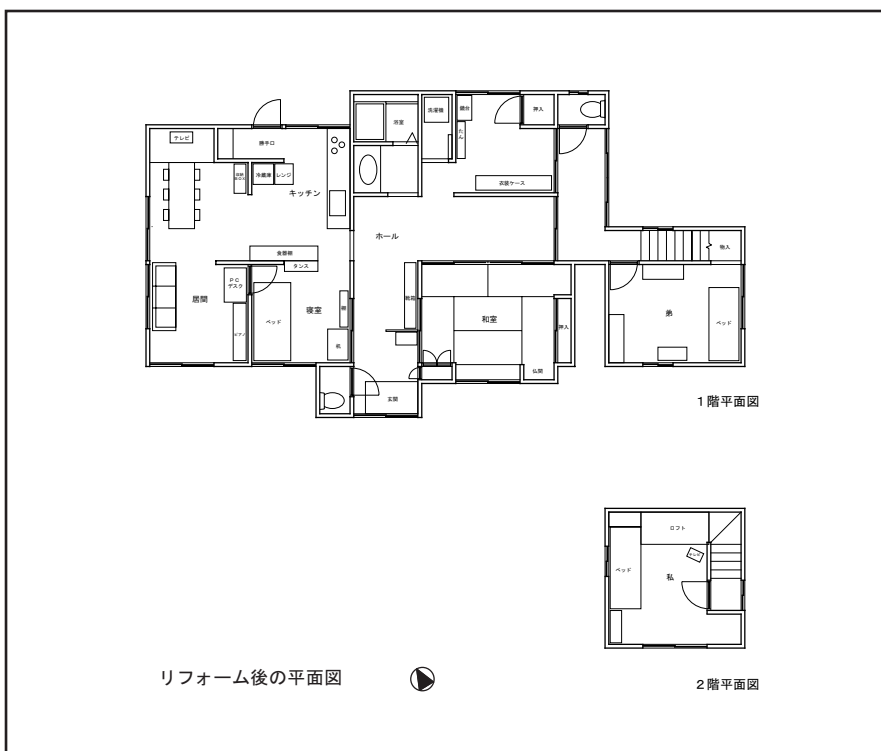
「建築」と「区画割り」の変化

- 現地調査をしたところ、当該地区の36戸が藩政期の建築と推定される。これは437戸の8.2%にあたり、今でも驚くほどの残存率である。32戸は、少なくとも1度以上住み替えられているのだが、140年以上という藩政期の家が、約1割も残っているのである。このような地区は、日本中ほかにはない。
- 組屋敷内でも、畑地や駐車場になっている区画や、隣を買い込んで2戸分を1宅地にしてある家もあるが、もともとの区画割りが270区画(61.8%)で残っており、このうち218区画(49.9%)にはそのまま建てた家が建っている。つまり、6割の区画が合併も分割もされておらず、ちょうど半数の区画に個別の家が建っており、きわめて安定的な居住地であるとみてよい。

では、なぜ彦根の芹橋足軽組屋敷はこのような安定的で、残りがよいのであろうか。

- 士族階級の武家屋敷は広大で、多くの下人下女を抱え込むことによって成り立った家である。したがって武士が給禄を失ったら、そのような家を維持できず、明治20年までにほとんど転出した。いっぽう足軽は、明治維新で同じように失業したが、明治20年の定着率は4割と大きく、武士とは全く異なっている。足軽は、自分の住宅と宅地以外なんの資産ももっておらず、自宅を売ればもう住むところがなくなってしまうので、自宅を大切にしたいと考えられる。
- 足軽住宅は、あくまでも家族だけで住むように建てられたものである。足軽組地の敷地は60坪強、そこに20坪くらいの平屋が建っていた。これは近代以後の家族で住む住宅として、まさに手頃な広さであった。
- 城下町彦根において芹橋足軽組地の位置を見ると、彦根城一上級士族一町人一芹橋足軽組地となり、三本ある外堀の外側に位置し、彦根城からは遠い。しかし町人町の銀座街や市場商店街に隣接する。つまり中心商店街に近接し、きわめて利便性がよく、住みよいところであった。
- 「御城下総絵図」によると、すべての街路は公式的に1間半幅(2.7m)となっており(実際はもっと狭い箇所もある)、街路はこの400戸を超過する居住地を均質に分割しており、子気味いいほどである。ちなみに全敷地に対して、道路や水路などの公用地率は8%程できわめて少ない。極端に狭い道が、ほぼ直線上に走り、明確で合理的な縄張りであるが、同じ風景が何度も繰り返されるということにより、逆に迷路性が生まれ、自分の位置を失う。
- 周囲の拡幅された街路をのぞき、藩政期のみならず現代まで、足軽組屋敷には1軒の店もない(塾教会医院を除く)。また芹川側は2m程の川堤で遮られる。つまり、ここに住んでいる人とその家を訪れる人以外、ここに人が来ることは全くなく、外から来た人が通り抜けることはありえなかった。人通りがないのだから、この土地を買って商店にしようというような動きは全くなく、純粋に労働者の住宅地であり続けた。

住み続けるために…



土地所有者の変化

	1836年	1887年	1950年	2009年	古い家の戸数
池洲町	10	2	0	0	0
勤定人町	23	9	1	1	3
十五町	52	16	4	2	3
十四町	75	33	7	1	7
十三町	48	17	2	0	3
十二町	48	24	4	1	8
十一町	48	17	3	1	3
十町	49	16	2	2	3
九町	45	20	0	0	5
八町	39	19	0	0	1
合計	437	173	23	8	36



増改築事例

私は生まれてから14年間彦根に住んでいました。そして中学3年生の時に、彦根に引っ越してきたのです。今住んでいる家は、古い家を買ったもので、継ぎ足し継ぎ足しながら造られてきたものです。なんと一番古い箇所は江戸時代から建っている足軽屋敷をそのまま使っています。

この家がどうして思い入れが強いのかというと、家族が一致団結し、みんなで力を合わせて、すべて自分たちでリフォームした家だからです。信楽の家から引っ越しをすることになり、新しい家を探して、今住んでいる家を見つけたとき、絶対ここだけは住みたいと思わなかった家でした。前の人がいなくなってからずっと放置されていて、手入れも全くされておらず、ぼろぼろで床も抜けそうになっていました。ほこりっぽくて、人間の住むところではありませんでした。しかし、立地条件のよさや、破格の値段からこの家を買うことになりました。私たちは引っ越しをするのはもう3回目だったので、お金もあまりかけられなかったし、この家を自分たちでリフォームすることにしました。

まずは、庭の手入れからです。今は、その場所にはガレージと増築した私と弟の部屋があります。無造作に生えた木や地中深くまで入っている根っこなどを、すべて手作業で引っ抜き、でこぼこになった地面をスコップで掘るなどして土をやわらかくし、平らに均しました。

外がきれいになったら次はいよいよ家の中です。まず、床の張替えと補強です。床板をすべてはがし、新たに購入してきた角材を足して補強し、その上に新しく和風のフローリングの床を建てつけました。江戸時代の建物の部分には掘り炬燵があり、それを埋めてしまう作業もしなければなりません。床が出来たら次は壁です。板がむき出しになった壁を、白壁に塗り替えました。それも全部自分たちでやりました。これだけで、やっと人間が住めそうな家になってきました。お風呂はとても小さかったので、新しくユニットバスを入れ、昔のお風呂場は洗濯場になりました。また、うちは家族が多いため部屋が足りなかったのです。2部屋増築しました。

この家は古い家ではあるけれど、家族全員で力を合わせて新しく作り替えた私たちの新しい家なのです。今も、家のいたるところに私たちの努力の痕跡が残っています。増築ばかりしている家なので、おかしな位置に壁があったり、和風と洋風がごちゃ混ぜになっていたりして、落ち着かないと言えは落ち着かない家ではあります。その上、正直に言うといい勝負も悪いです。しかし、それでも自分たちで汗を流してこしらえた家だと思えば、それも我慢できます。押入れを改造してテレビを置く台にしたり、小さな部屋をひとつなぎにして玄関に広いスペースをとるなど、さまざまな工夫をしています。この家に引っ越してきてからもう5年が経ちました。しかし、今でも壁を削って棚を置くことが出来るスペースを造ったりなど、家のリフォームは継続中なのです。普通、家を買うとなると大工さんに建ててもらおうか、中古物件を買ってそのまま使うと思います。私の家のように、ここまで自分たちで手を入れた家に住んでいる人はなかなかいないでしょう。そういった意味で、今の家はとても思い入れの深い家になっていると思います。

歴史のある古い家でも、住み手次第で住みよい空間づくりは可能である。空き家なども積極的に住んでもらえばよいのではないだろうか。